

ラスキンの山岳論

小島 烏水

〔三〕

『近世畫家論』の出る筋路を述べましたに付て、年月を御話すると、第一卷の出たのは千八百四十三年、天保十四年に當る、日本では水野越前守が御老中で、二分判だの、二朱銀だのといふお金を使つてゐた時代である、第二卷は千八百四十六年に出た、第一卷を出してから四年目であり、其時丁度弘化三年で、露西亞や米國の軍艦が餘程日本の近海を迂路つて、日本もソロ／＼門戸を開けなければならぬ時代に迫つて來た、それから又十一ヶ年ばかり經つて、第三卷四卷と二冊一度に出した、其第四卷に「山岳美論」があるので、山岳美と云ふことを見やうと思へば、第四卷を見るに限るやうに私は思ひます、此第四卷によつて、山岳に對する世間の趣味が喚起せられ、英國の山岳會——世界中で一番古い——が、翌年組織されたのであります。最後の第五卷は千八百六十年に出ました、此第五卷の出版された時は、日本の萬延元年に當りまして、水戸の浪人が白晝大臣の首を刎れ、櫻田門外、血は櫻の如しと謠つた時代に、初めて完結を告げたのであります、『近世畫家論』の第一卷から五卷までの間に十八ヶ年掛つた、併し其の間には『建築の七燈』『ヴェニス』の石『其他の名著を出してゐるので、何も『近世畫家論』にのみ、それだけの時が掛つて居ると云ふ譯では無い、前に申した通りラスキンが此近世畫家論の第一卷を出す、其時の『藝術界の辯難攻撃』は甚しかつたです、が、其中でラスキンの名文と其理窟の立つて居るのに非常に敬服して、詩人テニズン——第一流の大家——は實を言へばラスキンを小僧ツ子のやうに思つて居つた、其人が言葉を低うして一部を著者に乞ふた、其他、サアヘンリーテイロルと云ふは、自分の知れる誰彼よりも、深い、根底ある、想像力のある人だと言つた、阿父さんはラスキンがさう云ふ風に文壇に成功したので非常に悦び自分もカブレてターナー崇拜となつた、それでターナーの名畫とか板下畫とか金を有るに任せて集めた、今日「ラスキン、コルレクシヨン」と稱して英國に傳

はつてゐるターナーの繪畫は皆それである。

ラスキン^{ラスキン}はかうやつてターナーを紹介したばかりでなく、『近世畫家論』二卷を出すと、一つは有機鹽生物の研究二にはヴェニス^{ヴェニス}の大家チントレット^{チントレット}の紹介をしたのです、ラスキンがヴェニスでチントレットの畫を見るまでは世間の人は、さう云ふ大美術家がゐたといふことすら知らなかつたが、ラスキンの此著述に依つて非常に目が醒めたと云ふやうな有様になつた、それであるからラスキンがどれ程直正の美術家の爲に盡したが分らぬのである、それならばラスキンが『近世畫家論』に言うたことは、皆間違ひ無いかと云ふと、どうも、いくらひいき目に見てもさうばかりには往かない、併ながら燃ゆるが如き熱心を以て、眩惑するやうな文章を書く、恐らく一方に美術家を兼ねてゐて是位の文豪であつた人は、近代先づ無かつたらうと私は思うて居るです、ラスキンはカーライルと共にビクトリヤ朝に並び立つた大批評家であつたが或意味に於ては、カーライルよりも餘程私はエライと思ふ、人を動かす力の鋭いこと、詰りラスキン一人で「自然」と云ふものに對する全世界の趣味眼を、根本的に改革した功績は非常なものであると思ふ。(つゞく)

圖按法概要

比奈地畔川

〔六〕圖按の目的と効果

圖按は全ての物を作る上に於ての要素であると言ふことが出来る、どういふ大きなものでもどういふ小さなものでも、例えば建築物の様なものでも、携帶品の様なものでも、圖按の巧拙によつて作品の善惡が分れるのみでなく延びて工商業の消長にまで關する様になる。圖按の目的とするところは、目に華麗で許りよいではない、又單に、精巧にのみ作られてそれで目的が達して居るわけでもない、要するに物に應じ質に従ひ、其用途に適用する様作らなくてはならない、即ち各種工藝品の使用上、或は觀賞上に、恰然適合したものでなくてはならない。要するに工藝美術は、形式的の術を主要とする(純正美術はさうでない)故に模様を